



「官」対「民」

「官」対「民」を選んだので表彰式に出て来い。「新語・流行語大賞」選考委員会が伝えてきたのは信州・長野県知事就任直後の2000年晩秋です。硬直した二項対

立の意図を立候補前も選挙中も当選後も、一度たりとも使っていない僕は辞退。すると他県知事に当選した（現在は立憲民主党所属衆議院議員の）御仁が嬉々として出

★次号の田中の発行口は「田中」だ。

席する勇姿が報じられました。

解雇も倒産も無縁。上の顔色ばかり窺う「ヒラメ」公務員も、任用当初はパブリック・サーヴァントの気概を持ち合わせていた筈。

土木部に配属された「技術屋」は脚の不自由な独居老人の為に歩道の段差を改修したい、教育委員会に配属された「事務屋」は軽度な障がい児を地域の小学校と一緒に学ばせたい、と考えていた筈です。

が、前例踏襲な組織の中で何時しか冷温停止状態に陥ってしまう。選挙という洗礼を受けるサーヴァント・リーダーは、そうした哀しき公僕に「人間の体温」を取り戻させる触媒役たるべき。

元「毎日新聞」論説委員長・倉重篤郎氏の仲立ちで外務審議官を務めた田中均・日本総合研究所理事長と、発売中の「サンデー毎日」年末年始特大号で「憂国対談」と銘打ち、「2022年 日本

本の自立像」を語りました。「日本は今こそ慎重深いDecentな（見苦しくない）誇りを持つとうとツイッターでも発信する均さんは鋭い。弁証法なき空威張りの『日本凄い論』の面々とは対極だ。諫言という傾聴すべき提言。

なのにメディアは不毛な二項対立で「批判」と一括りする。

僕が述べると彼は「僕自身が政府の中に居たし、役人の気持が判る。物言えば唇寒しの霞が関で、誰かが自由に言わねばと政治を叩く事になる。メディアはそう考えない。役人叩きが常道。役人頑張れとは書かない」と呟きました。

誰もが分け隔てなく入れる公園こそ「公」の象徴。日本は、公共事業のイメージを引き摺る「官」と同義語と認識し勝ち。公を行う為に官と政の機能が存在し、官が歯車という官仕えなら、官を動かす為に「的確な認識・迅速な決断と行動・明確な責任」を併せ持った人物が行うのが政にも拘らず。

原題「City Hall」フレデリック・ワイズマン監督『ボストン市庁舎』が「洛陽の紙価」改め映価を高めています。ジョー・バイデン政権で労働長官に就任の、ジョン・F・ケネディ同様にアイルランド系カトリック教徒マティー・ウォルシュ氏が市長だった静岡市と同規模な人口70万人自治体に於ける「行政サーヴィス」を写真した長篇4時間34分。在任7年半、常に現場に出掛け

る首長の彼は職員や市民との直接対話を通じて「市民に扉を開く公正な行政」の「意識改革」を志します。「外交」にも通ずる「話せば判る」ならぬ「話しても判りきれない」からこそ話し続けねばならぬ、との信念に基づきます。「人々を従わせるのは容易でも、従うべきだと納得して貰うのは至難の業」が原義だった「論語」の「民は之に由らしむべし、之を知らしむべからず」を、「理由など教えても為ん方ない。有無を言わず従わせてこそ政治と行政の真骨頂」と曲解した日本との彼我の違いは歴然です。

故に「選良」は暗黙知「この国のありよう」を一向に国民に示さず、形式知「この国のかたち」の主張に終始し、誤送船団「記者クラブも「改革を止めるな」と時代遅れな抽象的テープレコーダーを回し続けているのです。

論より証拠。第一次安倍晋三政権以来都合28人の「拉致担当大臣」の一人として平壤に出掛けて接触もしないのに北風だけ吹かすやっつる感。太平洋を挟んで向き合う米國と中国の「同時通訳國家」を果たすなど夢の又夢です。